秋季大会発表要旨

特集

書物としての近代文学

【特集の趣旨】

運営委員会

いかなる文学テキストも、それを載せる器

がなければ、読者のもとへ届くことはない。

別言すれば、読者は文学と接する際、テキストに先立つて、まずはその器と接するのである。このようなモノとしての書物とテキストは、身体と心とに喩えられるかもしれない。

両者は、その性質を異にしながら同時に分ちがたく結びついている。文学も有機的な身体を伴ってはじめて現前するものであった。

また、文学は書物の持つオブジェとしての性質によって、読者を誘惑し魅了してきた。今日、文学がデータとして流通し、文学がそれ

までのような書物との関係性を更新しつつある状況の中で、書物はかえって人々のフェ

ティッシュな関心を高めているのも事実である。書物と近代文学との関係を分析することは、今後の文学を検討する上でも重要な営為であろう。

たとえば、近代の書物は、写真や挿画、装飾や書体といった視覚的な要素において工夫が重ねられ、さらに、用紙や製本素材、造本方法などの触覚的な要素の点でも技術革新を行ってきた。こうした要素は作家からはどのように関心を持たれ、利用されたのか。あるいは、テキストの受容とどのように関係してきたと言えるだろうか。

歴史を振り返るならば、大正後期から昭和初期の文学と書物の関係はとくに現代的な意義を持つように思われる。この時期には、齋

藤昌三や庄司浅水など、愛書家や書誌学者らによって、書物自体の意味を問う試みが行われていた。円本をはじめとする全集の流行と同時に、それへの反動として、江川書房や野田書房などの、オブジェとも呼ぶべき意匠を凝らした限定本の製作も盛んに行われている。いわば文学の身体について、多様な見解が唱えられ、実践された時期であった。

二〇一六年度秋季大会では、特集「流通する書物」の近代」が生まれ、近代における書物という媒体と文学との不可分の関係に改めて注目が集まった。本特集では、この問題について、とくにモノとしての書物という観点から検討を行う。デザインや装幀などの実践の側からの知見をも取り込みつつ、書物との関係性の中で見える、テキストや文学の受容のあり様について考えてゆく。議論の中で、出版研究や書誌学など、隣接領域の研究成果についても、「近代文学とは何であるのか」という問いに有機的に統合してゆくことも試みたい。

著書を纏う装幀、そして作家の創作意識

——室生犀星を例として

一色 誠子

西洋活字本の洗礼を受けて二世紀も満たない中で、日本の装幀スタイルを模索する動きが表面化され、装幀に関しての言及が多くなり始めたのは関東大震災以降である。俳句・短歌・小説・随筆・評論・戯曲・童話と、多岐にわたる文学活動をした室生犀星もその一人である。犀星の場合、「書物の装幀」(読売新聞)昭和二年四月(三日)あたりから、装幀と造本に関する言及が始まる。「装幀と著書」(時事新報)昭和三年七月四日)では、「著者こそ凡ゆる装幀家の中の装幀を司るべきである」と、自装への強い意思を示し、「装幀学」(中央公論)昭和四年七月一日)では、「装幀は内容と一致しなければならぬ」といふ条件は、装幀学の上で誰でも気の付くことである。(中略)装幀は小説や詩の命題のやうな効果と役目を負うてゐる」と、装幀と著作の内容との一致に言及する。

このように述べる犀星の本づくりは独特である。小説集『性に眼覚める頃』(大正九年一月 新潮社)出版以降、複数のジャンルを一冊に集め著作集を出版していく。例えば、初の自装本である『忘春詩集』(大正一一年一二月 京文社)では、詩の他に短編小説一五作品、童話三作品を所収している。随筆の執筆が増える昭和二年から昭和一二年の間にも、複数のジャンルの作品を一冊に編集するスタイルをとっている。このような本づくりは、韻文を核としながらも、表現する内容によつて韻文と散文とを自在に行き来した犀星ならではのことである。犀星は初期から晩年に至るまで、直接あるいは間接的に自著の装幀にかかわることを繰り返してきた。犀星が自らを確認するかのようになんや擬自伝を書き続けたように、あるいは、新しい詩集の出版がしばしば途絶えると、その時々になんやロジを編みその中に自らを生き返していたように、繰り返される造本もまた自己確認の要素を持つ。

本発表では、室生犀星を例として、自著の編纂と装幀がどのように関係しているかを論じたい。

意匠としてのテクスト

——活字組本文イメージを使用した装幀

真田 幸治

近代の装幀に目を向けると、表紙(もしくは外装)の意匠には「絵」が配されている例が多く見える。テクストを「絵」に翻案し、読者にわかりやすく視覚的に伝達するスタンダードな装幀の手法と言える。

また、テクストの象徴的な場面が描かれた「絵」が口絵として綴じ込まれた明治期や大正初期の本のような例もそこに含まれる。

しかし、当時の初刊本の意匠は決して「絵」だけではない。テクストを「絵」に翻案するのではなく、本来、本の中にあるべき金属活字で組版された本文の「文字」が、内から外へ表出している例があるのだ。

明治三〇年に刊行された尾崎紅葉の『多情多恨』(春陽堂)、大正一〇年に刊行された宮地嘉六の『群像』(太陽堂)、昭和七年に刊行された龍膽寺雄の『虹と兜虫』(改造社)、こ

れら明治、大正、昭和初期に刊行された三冊の初刊本では、その装幀の意匠の構成要素として、テキスト自体とも言える活字組版された本文イメージが採用されている。

表出した本文は当然、テキストの象徴的な場面、もしくは連載回から抜き出されている。しかし、一目でそのテキストを伝達することが出来ない、読む行為を必要とする「文字」は意匠としてどのような可能性、意図が込められていたのか。

例えば『多情多恨』の表紙では「絵」の背景のように「文字」である本文が配され、それは小説空間と読書空間が組み合わさっていると見なしでもいいだろう。そして本文が表出することによって言文一致の文体さえも意匠の一部として組み込まれている。また『群像』の函では、初出時の活字組版が意匠として採用されており、読者は一目でこの作品が「新聞連載小説」であったことを理解することになる。

活字組版された本文とテキストが、本来の役割のみならず、意匠として新たな役割を担う過程を確認することで、近代装幀史における見過ごされてきた、意匠としての活字組版

された本文と文字とテキストの関係を明らかにしたい。

書物表現の文学史

多田 蔵人

日本近代文学の流れをたどると、大正時代の後半ごろから、書物の物質的な側面に言及する作品があらわれることに気づく。表紙の色や材質、製本、インクや墨の色、活字、筆跡、来歴、購入方法、廃棄方法、などである。これらのテキストが描く〈物〉としての書物に光を当てることで、個々の作品がもつ主題をあらためて浮かびあがらせるとともに、文学史の転換点をさぐってみたい。

文学が書物の存在をあらためて意識しはじめることの背景としては、出版技術の向上や流通制度の整備、そして関東大震災の経験などが挙げられる。野田書房や江川書房の豪華本から縮刷本の重版や円本、書物雑誌や古書目録に至るまで、本を意識する契機は多くある。この時代の作品群はそうした外的条件を

反映しつつ、書物をまるで人物や美術品を描くように細叙するのである。

骨董品のように書物を描く文学は、まずは、人間や自然風景を模写しつくそうとした明治文学の表現を掘り下げるものであった。言葉や絵が書かれている書物を克明に描写したこれらの作品には、リアリズムにおける言葉の位置づけを変えようとする志向を読みうる。

やがてそれらの書物は、実体としての作者から切り離された物語の姿を描きはじめる、というのが現時点の見取図である。

こうした探究によって文学史と書物史の接点をさぐる手が、本発表のもう一つの目的である。挿絵や印刷・出版形態、流通や読書などの事項は、多くの場合、テキストの外部にあるものとして捉えられることが多い。書物環境と本文との関係、あるいは書物と本文とのズレがもたらした意味などについての研究は既に成果を挙げてきた。ここでは、本文の内部に描かれ、テキストの意味を先験的に組織する書物の意味を読んでみたい。なお「自筆本怪夢録」と「偽書本怪夢録」という二つの書物が登場する、永井荷風『来訪者』の書物表象を、中心的に論じる予定である。

講演 時代の刻印

白 井 敬 尚

書物に記される時代性とは——。書名、著者名、出版社名、発行年。そして記述される内容、文体と構造、用語、句読法。物質としての造本形式、サイズ、用紙、組版・印刷方式、書体とその組体裁、デザイン（色と形）……。

書物の研究においては、書物の核となる内容、そして著者とその背景といった内的対象とともに、物質として書物を形成する外的側面についての調査・分析も、研究対象として存在する。僕の職業は書物の制作者（デザイナー）であり、これらの外的形成に「作る」という角度から携わる。制作（製作）の現場では、いつの時代もその時代のなかでもっとも利便性と汎用性の高い、あるいは、目的に応じた機材・資材・素材・方式が選択される。書物がテキストの器だとすれば、外的形成物（オブジェ）は、それ自体が本質なのではない。

そう、だからこそ書物は魅力的なのだ。

僕は書物の研究者ではない。研究者ではないが、これまでにわずかながらに知り得た先人たちの知恵や知識、そして造形を引き継ぎ、その魅力を現代という時代のなかで改めてコミットさせることができるのであれば、利用しない手はない、と考える。

イタリア・ルネサンスのあまりに魅力的なアルダス・マステイウスの組版「ハーフ・ダイヤモンド・インデンション」。いつまでも愛でていたいフランス・ルネサンスの優雅なフラロン、パロック・ロココの荘厳な花形装飾、精緻極まりないヴィクトリア調のプリンターズ・フラワー。クラシック・ブック・フォーマットの静的均衡、あるいは動的均衡によるホイットスラー、マラルメ、パウハウスの組版造形。恩地孝四郎から北園克衛、そして清原悦志へと連なる空間構成。これらは時代の水平軸と縦軸に影響を与え、繁栄と衰退を繰り返しながら更新され続ける。

応用と転用、参考と引用、置換と変換、複製と改訂、リスベクトと剽窃……。時代の刻印——それがデザインであり書物なのだ。

【略歴】白井敬尚（しらい・よしひさ）一九六一年愛知県生まれ。一九九八年白井敬尚形成事務所を設立、タイポグラフィを中心としたデザインに従事し、主に雑誌や書籍のブックデザインなどを手がける。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科教授。ミームデザイナー。学校講師。

秋季大会研究発表

第一会場（B二五五教室）

個人発表

永井荷風『濯東綺譚』論

——大江の「濯東綺譚」の相対化——

アブラル・バスイル

「濯東綺譚」の主人公・大江匡は、玉の井の娼婦たるお雪と別れるに至るまでの心の動きを、一篇の文章として綴っている。その中で大江は、お雪から持ち掛けられた結婚の相談について、彼女が「懶婦」や「悍婦」になろうとしている、と一蹴する。もし彼がこうしたお雪の（勘違い）を正すならば、彼女は「甚しく失望し、甚しく悲し」むであろう。したがって、不本意ながらもお雪と別れるより仕方がない。これが大江の論理である。

右のような大江の言説を背後から支えているのは（お雪はその境遇を悲しんでいない）という彼一流の「観察」であり、だからこそお雪を悲しませたくないのだと大江は主張する。しかし、まさしくお雪が結婚のことを口にする場面において、彼女が「言い知れず淋しく見えた」旨が記述されていることなどに鑑みれば、彼の「観察」がお雪のありようについて、その実態を反映しているとは見做し難いだろう。むしろ大江の「観察」は、お雪を「窓の女」という恣意的な枠の内に嵌め込むものにほかならない。

大江は自身の行動について、それがお雪を庇うためのものであったと位置づけている。こうした主張によって大江は、自身の振舞いがお雪を含む「窓の女」たちの「薄倖な生活を芝居でも見るやうに、上から見下ろしてよろこぶ」性質のものではなかったとして、自らを弁護していると考えられる。つまり、大江はお雪との逸話を一篇の物語として叙すことで、半生にわたる花街通いの心理に論理づ

けを行い、それを正当化することを目論んでいるのである。

こうした作意のもと著された作中作「濯東綺譚」の論理的枠組みを突き崩すことで見えてくるのは、大江の試みが、ほかでもない「濯東綺譚」というテクストそれ自体によって相対化されているという事実である。本発表では以上の観点から「濯東綺譚」を精読するとともに、本作と荷風の他作品との小説作法上における連関性を明らかにしたい。

葉山嘉樹「死屍を食ふ男」論

——豊津と怪談——

レッキー・リチャード・ウイリアム

『海に生くる人々』の刊行から半年後、葉山嘉樹は「死屍を食ふ男」を『新青年』（昭和二年四月号）に発表した。娯楽雑誌での発表だったが故に、当時の文壇に黙殺された本作は、今でも「葉山嘉樹には珍しい怪奇小説」（浦西和彦）として、本格的な作品考察も、本作を葉山文学の中で位置づける試みもなさ

れていない。しかし、本作は、葉山が決して多くを語らなかつた故郷・福岡県豊津村の街並みを最も忠実に描いた作品として、そして生前発表されたものの中で唯一、葉山の母校・福岡県立豊津中学校を舞台にした作品として、大きな研究意義を持っている。

本発表では、第一に、昨年夏に葉山の故郷（現・福岡県みやこ町）と母校（現・福岡県立育徳館中学校・高等学校）で行つた実地調査を基に、「死屍を食ふ男」における事実と虚構を考察し、自らの故郷を詳しく描いた本作を『新青年』に載せた葉山の意図について考える。

第二に、「死屍を食ふ男」の基になつた怪談を紹介し、本作における「屍肉を食べる」行為の意味合いを探る。本作は、明治末から日本各地に広まつた学校の怪談に基づいて書かれたものだが、この怪談の背景には「人体の一部を食べると病気が治る」という古くからの言い伝えがあつた。明治末期に入つても、この言い伝えは一部では残っており、近代医学に反した迷信として新聞で面白おかしく紹介されたり、小説や怪談で恐怖の対象として扱われたりしていたのである。

「死屍を食ふ男」の原話、そして作者の故郷・「豊津」を併せて考えることによつて、怪奇性がかりが強調されてきた本作に新しい光を当てると共に、「プロレタリア作家」という既成の枠組みから解き放たれた視点に立つて葉山嘉樹とその文学を見つめ直すきっかけを得られればと思う。

宮澤賢治テクストの越境と翻訳

—— 田村俊子主宰の上海華文雑誌『女聲』を中心に ——

張 永 嬌

本発表は一九四〇年代の上海女性雑誌『女聲』における宮澤賢治テクストの越境と翻訳に着目し、考察を行うものである。

宮澤賢治は一九二五年から草野心平の誘いで同人雑誌『銅鑼』に参加し詩作を寄稿した。このことをきっかけに、宮澤賢治のテクストは中国で紹介されることとなったが、戦時下の一九四〇年代になると、宮澤賢治のテクストは満州において糧穀供出・大陸開拓・精神

高揚の目的のために雑誌に掲載されたことが、先行研究により既に明らかになっている。一方、同じ一九四〇年代の上海における宮澤賢治の受容に関する先行研究は極めて少ない。一九四二年五月、田村俊子は上海で『女聲』を創刊した。その雑誌の資金・人脈・経営・出版社・編集室などを究明することで、草野心平を始めとした日本の文壇や、関露・陶晶孫などの中国知識人との関係も浮上していく。こうした文脈を踏まえるなら、一九四三年一二月に『女聲』第二巻第八期に「注文の多い料理店」が中国語訳され、「定件繁多的館子」として「文芸欄」に掲載されていることはどのように捉えられるだろうか。

まず、意図的な訳の変更と内容の削除によつて宮澤賢治のテクストが再生産されるプロセスを追求し、再生産されたテクストがどのように機能しているかを明らかにする。その上で、満州での受容のされ方との対比を行うことで、地域の区別と受容層の差異から草野心平を中心とする編集側の意図を探る。さらに、補助線として「映画物語 風の又三郎」が新聞記事（『大陸日報』一九四〇年十月一日）八日・十月二六日、全八回、大陸日報社」と

して上海で連載されたことを取り上げる。すなわち、中国人女性向けの雑誌に掲載された翻訳と上海在住の日本人向けの新聞記事とを比較し、読者層とメディアの問題を考察する。本研究は中国における宮澤賢治の受容の変遷を辿りつつ、植民地上海における宮澤賢治テクストの再編成とその機能を明らかにする。

パネル発表

内包される暴力表象

——他者・異文化理解の側面から

大村 梓・杉淵 洋一

助川幸逸郎

(ディスカッサント) 石田 仁志

文学作品において「暴力性」は重要な主題として捉えられてきた。これまで特に戦争や犯罪に関連付けられた身体的な目に見える形での暴力は非常に分かりやすい形で読者に理解されてきたと言えるだろう。本パネルでは顕在化しづらい他者認識に内在する「暴力

性」、つまり受容する側と受容される側という恣意的な関係性①他者認識における暴力的な枠組みの存在、②異文化理解の過程における「暴力」概念の変容・喪失、③エキゾチシズムに内在する暴力性について同文化内・異文化間の視点を交えて多角的な議論を行う。

①助川幸逸郎(岐阜女子大学)は「帰属させる／帰属させない(暴力)〜今村夏子『あひる』を中心に〜」というテーマで今村夏子作品における「暴力性」について「あひる」を中心に発表を行う。『あひる』では語り手である「わたし」の両親、「わたし」の兄、「わたし」の家の庭で飼われているあひるを見ながら「わたし」の子どもたち、それぞれが「自分のパースペクティブ＝物語」に他者をとりこむようにする。そうした物語を持ってない「わたし」は、「自分の物語」を確立するために他者が立てる騒音に悩まされつつ、どこにも帰属できないまま生きている。「わたし」以外の登場人物が、自己の認識の枠組に他者を暴力的に従属させようとしあっているのは明らかである。しかしそれではどこにも帰属できない「わたし」は、ただ他者の暴力にさらされているだけの存在なのだろうか。「マイノリ

ティとして在ること」がマジヨリティを揺るがす力は、マジヨリティ性の確立のために他者を一つの枠にはめようとする暴力と、どのように違うのだろうかということを、他の今村作品にも言及しながら考えていく。

②次に杉淵洋一(愛知淑徳大学)は「フレンチ・アナキストたちの(暴力)」は日本の知識人たちによってどのように処理されたのか?というテーマで発表を行う。有島武郎、石川三四郎、芹沢光治良の三人は、それぞれのヨーロッパ滞在時に、フランスにおけるアナキストの先駆けとされるルクリュ家との直接的な交流の機会を持っている。ルクリュ家の人々は、テロ事件に連座して逮捕、国外追放の処分を受けたり、第一次世界大戦における対独戦への参加を呼び掛けたりしており、共産主義的なユートピアの構築を構想する一方で、その「暴力」的な側面でも知られた一家であった。しかしながら、このルクリュ家と交流のあった有島、石川、芹沢の三人に、ルクリュ家の暴力的な側面が伝わった形跡を認めることは難しい。それ以上に、この三人は、ルクリュ家の人々から欧米型の「相互扶助」の思想を受容し、その思想を日本国内へ

と広めようとしていた痕跡が、彼らの帰国後の言動には広く認められる。そこで、本発表では、有島、石川、芹沢の三人が、ルクリュ家の「暴力」的な部分について、どのような理解を示していたのか、三人とルクリュ家の人々が残した言説などを中心に探っていき、ルクリュ家の人々がこの三人、ひいては日本のアナーキズムに果たした役割について方向性を示す。

③最後に大村粹（山梨県立大学）は「エキゾチズム」に内在する暴力性・堀口大學と日本文壇」というテーマで発表を行う。「エキゾチズム」という文学モチーフではピエール・ロチが『お菊さん』で日本を描写したように、常に肯定的でリアリスティックな異文化像が描かれるわけではない。そこには時に暴力的な力（恣意的な異文化理解に繋がる恐れがある）が作用することがある。翻訳文学が受容される場合には作品は常に種の異国性を付与される。つまり「外国文学」としてまず認識され、そしてそこには「エキゾチズム」という趣が付け加えられることとなる。堀口大學は戦前・戦後にかけてフランス近代詩・モダニズム文学の翻訳家として広く

その名を知られた存在である。十代後半に雑誌『スバル』で新詩社の短歌の影響を受け創作を始め、その後二十代のほとんどを外交官である父親について諸外国で過ごし、日本に帰国後は訳詩集『月下の一群』を発表するなど日本とフランスの仲介者としての役割を期待されていた。本発表では新詩社の若き文学青年からエキゾチックな詩人・翻訳家へといったる日本文壇での大學の役割の変化を、大學の意図を超えて訳文に付与された「エキゾチズム」に内在する暴力性という視点から創作詩・短歌と訳詩の相関に焦点を当てて考察する。

以上三人の発表後にディスカッションである石田仁志（東洋大学）が加わり、文学テクストや文学者の言説の分析を通じて、他者理解・異文化理解が自己や自文化に与える影響の中に内包される秘められた暴力性（表象されざる表象）について議論していきたい。そのことは「文学」がはらんでいる危うさをも考えることにつながるのではないだろうか。

第二会場（B二五三教室）

個人発表

坂口安吾「淫者山へ乗りこむ」論

——行動主義・社会主義リアリズムとの
関連から

大 西 洋 平

坂口安吾「淫者山へ乗りこむ」は、一九三五年一月に『作品』誌上で発表された小説である。本作には許嫁との婚約が決まった青年が、許嫁の父親のカフェ遊蕩を目の当たりにして、なぜか結婚に対して気後れをすることから始まる。以後、物語は青年の悩みが展開され、なぜ結婚へ気後れを感じているのかを自ら説明するため、許嫁を強姦しようとする行為に出る。強姦は未遂に終わるものの、最終的には許嫁の女性だけにしか色欲を発動させることが不可能になってしまう結末を迎える。

この小説について、本発表では次の二点を視座として論じる。①安吾は一九三三年一月、雑誌『行動』誌上にて「ドストエフスキとバルザック」というエッセイを発表する。

当エッセイは創作理論的性格を有しており、描写に際して「説明」ではなく「行動」を重点化することが述べられている。他方、「淫者山へ乗りこむ」では青年の心理を語り手が過剰に解説するという局面が多々見られ、三三年時点での創作理論と三五年での実作が捻じれた関係にあると言つていいだろう。本発表では「青年」と語り手の距離に着目することとで、坂口安吾が一九三五年（所謂「昭和一〇年代」）へと突入するに際して有していた

創作理論の一端を明らかにしてみたい。②「ドストエフスキとバルザック」はその表題が示す通り、バルザック論的性格もまた兼ねている。この性格から同時代の社会主義リアリズムとの関連を明らかにしたい。また発表媒体が雑誌『行動』＝舟橋聖一らによる行動主義の拠点媒体であったことを重視し、社会主義リアリズムと同様、行動主義との関連性についても一考し、小説「淫者山へ乗りこむ」と併せて、同時代における安吾の文学活動の

一面を位置づけてみたい。

〈世間話〉と〈歴史Ⅱ物語〉

——坂口安吾「真珠」論——

徳 本 善 彦

坂口安吾「真珠」は一九四二年六月一日発行の『文藝』に掲載された短編である。翌年一〇月刊行の『真珠』（大観堂）に収録されたが、他の収録作が検閲の対象となり再版が禁止された。

「真珠」では、一九四一年二月八日、特殊潜航艇に乗り込み真珠湾で絶命した九名の特攻隊員に対し「あなた方」と語りかけながら、語り手である「僕」の二月八日前後の

行動が対照的に語られる。加えて、フランス人飛行士のエピソード、自分の遺骨を花畑にまくように遺言した老翁のエピソードが挿入され、軍神となった九名の当日の行動を中心に四つの節から構成されている。これまでに指摘されてきたように、「あなた方」と呼びかけて語られる内容は、一九四二年三月六

日にラジオで公表され、翌日の新聞に掲載された「武勲」に基づいている。三カ月を経て語られる、安吾と思しき「僕」が過ごした一九四一年二月八日に不相応な（ぐうたら）な日常が、テクストの外に実在した現実の二月八日を語り直す報道と接続されている。本発表では、三カ月を経て語り直されることで受容された「あなた方」の物語（カタリ）

に対し、それとは無関係に淡々と語られる「僕」と「ガランドウ」の日常を（世間話）（柳田國男に拠る）として対置する。出来事を物語Ⅱ歴史に回収しようとする報道に対し、どこにも接続されないような日常的なハナシを差し入れることで、時勢に対する際どい批評性を「真珠」というテクストが持ち得ていることを新たに示す試みである。

これまで、「あなた方」という二人称複数に語りかける文体に「僕」という一人称の語りが同時に存在していることの意味については明らかにされてこなかった。テクストで語られる内容に限らず、文体と表現方法（語られ方）について意識的であった安吾が「真珠」で実現したことを改めて考察する。

「肉体文学」再検討に向けて

——池田みち子の諸作品における「肉体」から——

森 祐香里

本発表は、「肉体文学」の代表作家である田村泰次郎との比較から池田みち子の諸作品における「肉体」表象を考察することで、「肉体文学」、ひいては終戦直後の「肉体」表象の再検討を図るものである。

田村泰次郎は「肉体が人間である」(「群像」一九四七年五月)等において、「肉体」の「苦痛」や「欲望」といった「肉体」による感覚や欲求を戦前戦中の日本を支配した「既成の「思想」との関係から対立的に捉え、「肉体」に戦後新たな「思想」、ひいては「人間」の根拠を見出した。本発表では、まず田村泰次郎が示した「肉体」と「思想」との関係を巡る認識を中心に田村泰次郎の「肉体」観の問題点を整理し、その上で池田みち子の諸作品における「肉体」について考察していく。

池田みち子は「女田村」や「女坂口」といっ

た呼称によって「肉体文学」の代表作家の一人として認知されていたにも関わらず、「肉体文学」研究の枠組で論じられてこなかった作家である。くわえて、「肉体文学」の代表作家の一人として見做されながらも、池田みち子は「肉体と道徳」(婦人文庫)一九四八年六月)において異性愛関係における「肉体」の「本能」と「道徳」との関係思索するなかで、戦後の〈性の解放〉現象について疑義を示していた。本発表では、池田みち子のエッセイ等から「肉体」を巡る認識の整理を行い、これを補助線に「腐肉」(「三田文学」一九四八年一月)や「肉体の履歴」(「小説新潮」一九四九年七月)等の池田みち子の諸作品における「肉体」について考察する。欲望との関わりから「肉体」を軸とした性愛関係がいかに成立していくのか、池田みち子の諸作品における「肉体」表象を考察することを通じ、「肉体文学」を中心とした終戦直後の「肉体」表象に関わる諸研究に新たな視座を示したい。

パネル発表

明治〜大正期の演劇／演芸と近代小説の編成

——メディア間の相互交渉とアダプター
シヨンの視点から

大橋 崇行・柳瀬 善治

神林 尚子

(デイスカッサント) 日置 貴之

現代において、演劇・演芸・小説は、それぞれ異なる表現メディアとして独立して扱われることが少なくない。たしかに舞台演劇とその脚本は、場面の展開や演じる俳優の身体性、舞台における時間的な制約などから、そこで演じられる物語をそのまま小説に移し替えることは難しい。また演芸についても、落語や講談で語られる物語と、小説として書かれる物語とでは、物語の語られ方や構造など、さまざまな側面で差異があるように見られてきた。こうした差異を背景として、演劇・演芸を小説というジャンルから分離して論じる

研究傾向が生じたものと考えられる。

しかし、明治期の演劇や演芸と小説との関係や、草創期の〈近代文学〉について考えるとき、双方の距離は、実は、現代のそれと較べてはるかに近かったのではなかったか。

たとえば、実録体小説は講談に接続しており、明治期の時代小説は物語の内容面に關しても少なからず講談を継承している。歌舞伎の演目については、草双紙や読本、合巻において同じ物語が次々と編成されているだけでなく、さらに落語や講談で同じ物語が語られることもあり、ここから一つのメディアだけでその作品を考えるのではなく、双方の具体的なつながりの中で考えていく必要が生じる。

また、こと落語に關しては、従来の研究では、坪内逍遙『小説神髓』や二葉亭四迷『浮雲』におけるいわゆる〈言文一致〉の問題について、三遊亭円朝の落語速記本が文体の視点から論じられてきたのが中心であった。しかし、それにとどまらず、落語などの口承文芸が物語の構造や具体的な語り方について近代小説の編成そのものに関わっている可能性を想定するべきであろう。

これらの問題を考えていくためには、たと

えばリンダ・ハッチオンによって示されたアダプテーションの理論を援用することも可能であろう。また、複数のメディアにまたがりながら共通の物語を編成する「まとまり」を言説群として捉え、それらの具体的な編成過程について調査、分析していく手法も必要と考えられる。その際、江戸から続く演劇や演芸が、明治期に西洋から入ってきた様々な文学の要素をどのように受け入れたのか／受け入れなかったのか、その中で江戸と明治とがどのように接続していったのかについても、常に目を配らなくてはならない。特にこの領域は、三遊亭円朝や河竹黙阿弥などごく一部の落語家、劇作家を除いては資料調査もほとんど進んでいない場合が多く、まずは基礎的な研究を積み重ねていくことが重要である。

以上のような問題意識のもと、本パネルでは三人の発表者がそれぞれ、明治・大正期における歌舞伎、講談、落語をとりあげ、特に小説との関係や、言説群に表れた価値観の様相について、分析、考察を行う。

神林尚子は、江戸の事実に基づく「烈女ふじ」に関わる作品を取り上げる。幕末の事件の風聞から生じたこの題材は、安井息軒「阿

藤伝」等を介して、明治期の漢文体の伝記や女訓類、藤本藤陰による小説『藤の一本』（明治二四年刊）等に脚色されている。今回は、塚原洪柿園による小説『藤江』（『太陽』所載、明治四四年六月）と、これを原作として翌年三月に帝劇で上演された歌舞伎『緋桜』を中心に、明治末年の小説と演劇における「忠孝」の強調と「理想的」女性像を考察し、近世から近代への差異と連続性を探る。

大橋崇行は、三遊亭円朝『錦の舞衣』（酒井昇造による速記本が明治二六年刊）を扱う。この斬は、円朝が後にジャコモ・プッチーニのオペラ『トスカ』となるヴィクトリアン・サルドウーの『ラ・トスカ』の内容を聞いて作ったとされており、物語の構成や語りの視点において、従来の落語とは大きく異なる側面を示している。そこで、この斬についての具体的な分析を踏まえた上で、特に同時代の小説における構成、語りのあり方との関係性について考察を行う。

柳瀬善治は、明治四一年から大正五年にかけて愛国婦人会台湾支部の機関誌として刊行された『台湾愛国婦人』を取り上げる。この雑誌には落語や講談の速記が数多く収められ

ており、本パネルでは渡辺政徳「愛国婦人」(大正四年)を取り上げる。この新作講談と参照元となった福地桜痴『女浪人』(明治三十五年)との関係に見られる語りの問題、新選組や長州戦争の逸話の語られ方や、植民・愛国などの近代的なイデオロギーがどのように関わったのかについて考察を行う。

以上の発表を踏まえた上で、ディスカッションに日置貴之を迎え、フロアも交えて議論を進める。大衆舌耕文芸のナラティブが小説・演劇との接点を通じて、資本主義・翻訳・国民国家・植民地といった近代化の枠組みの中でどのように変容し別の分節化をされていくか、そしていかに現代まで生き残ってきたかという問いを本パネルを考察することを通じて、小説中心に記述されがちな近代文学史の再考・議論を促すことができれば幸いである。

第三会場 (B二五) 教室

個人発表

〳犠牲〵をめぐる複眼的思考

——大西巨人『たたかいの犠牲』と「政治と文学」論争

杉山雄大

大西巨人の小説第三作『たたかいの犠牲』(『新日本文学』第八巻第四号、一九五三年四月)では、『精神の氷点』、『白日の序曲』の中心的な主題であった虚無主義からの脱却の問題は措かれ、サンフランシスコ講和条約(アメリカとの単独講和)に抗する学生運動が、破格の分量を占めるさまざまな引用とともに描かれる。本発表では、以上のような特徴を踏まえ、同時代の文壇における本作の批評性を検討する。

主人公の大館章生は、『ドストエフスキー』ラマーゾフの兄弟』の作中人物・イワンによ

うに「将来の人類の幸福と目前の一人の赤ん坊の生命の犠牲と」を二者択一的に対置する問題提起を、「ドストエフスキー風な悪意の問題提起・狡猾な二者択一」と批判する。当時、実際にそのような問題提起を行っていたのが、敗戦後の「政治と文学」論争の火種となった平野謙の評論「ひとつの反措定」(『新生活』第二巻第四号、一九四六年五月)である。平野はイワンの問題提起をモデルとして、〳目的〵の正しさによって〳手段〵の誤りを正当化する「政治」的な思考を批判し、既存のマルクス主義文学運動を退けた。平野によって提起された目的と〳犠牲〵の関係をめぐるイワンの議論は、その後「政治と文学」論争の周辺で小田切秀雄や福田恆存によって扱われていく。

『たたかいの犠牲』では、犠牲を出さざるを得ない状況に直面しつつも、「生きてゐたい。周りにゐるみんなも生かしておきたい」と願う赤軍自動車部隊指揮官・サフォノフ(シーモノフ『ロシヤの人々』)の引き裂かれた心情が、イワンの問題提起と対置される。

本作は、目的の実現にともなう犠牲を二者択一的に拒絶するイワンの思考回路を、独ソ

戦におけるサフォノフの立場や心情と対比し、さらにまた全面講和を求めて活動する敗戦後の学生運動における犠牲者の問題と接続し、歴史的・具体的に再考する試みとして、同時代的な批評性を持つのである。

安岡章太郎「陰気な愉しみ」論

——「私」における戦中・戦後の連続と断絶について——

安藤陽平

安岡章太郎「陰気な愉しみ」(『新潮』一九五三・四)は、傷痍軍人として手当を受給しながら占領下横浜で生活する「私」を描いた小説である。「私」は手当を受けることに負い目を感じたり、街で出会うアメリカ人に劣等感を抱いたりしている。これまではそうした「私」の在りようを作品構造と結びつけた分析や、当時の横浜の都市状況を踏まえた考察がなされてきた。

本発表ではそれらの成果も視野に入れながら、「私」における戦中・戦後の連続と断絶

の諸相を読み取りたい。そのために、傷痍軍人である「私」の身体や知覚、ふるまいを横浜(都市空間・映画人間の階層化(「人種」)の観点から分析していく。

すでに、主たる舞台が桜木町・野毛/伊勢佐木町で、それぞれ日本人/占領軍の街として対比可能という指摘がある。だが野毛に注目すると、同地は闇市の情景をとどめていた一方で「復興」しつつある空間でもあった。

そうした文脈から「私」の身体やふるまいを新たに意味づけていく。

映画に関しては「私」が映画俳優ロイド・ノーランを意識してふるまう場面がある。のみならず、映画は「私」の在りようや知覚にも関与していることを明らかにする。都市・映画の観点では、従来影響関係が指摘されてきた梶井基次郎との比較によって本作固有の意味も明らかになるだろう。

そして人間の階層化であるが、「私」はアメリカ人に対して劣等感を抱き「人種がちがう」と感じている。だが本作はアメリカ(戦勝国)/日本(敗戦国)という二項対立で解

その点を重視し、戦勝国への劣等感にとどまらない解釈を導き出す。

結論では、以上三つの分析を戦中・戦後の連続と断絶という問題系から関連づけたうえで、作品結末部における「私」と靴磨きの女のやりとり、そして「私」の「愉しみ」の内実に迫りたい。

足踏みする軍靴

——安岡章太郎『遁走』論

泉 溪 春

安岡章太郎『遁走』(昭和三年一二月、大日本雄弁会講談社)は、軍務から落ちこぼれてしまう安木加介を主人公とする作品である。過食が災いし「下痢」となった加介は、「内臓」の失調に軍隊への「復讐」を見出す。先行研究はここから「外部」⇨軍隊空間と、「内部」⇨「内臓」や異常食欲という図式を立ち上げ、身体「内部」における自己保持の可能性を議論し、軍隊への「抵抗」を論じてきた。

しかし「内臓」や消化機能に「自由」な「自己の意志」を見出すことを、軍隊への「抵抗」といえるだろうか。加介の過食が、軍隊での洗礼を契機としたことに注目すれば、個人が「自分の意志」を保持していると認識する「内部」すらも、軍隊生活の影響からは免れないという事態を描いているのではないか。

右の問題意識の下で、まずは「軍隊での服従」の語られ方に注目する。「服従」とは、「我慢すること」ではなく、「見つけれられないようにすること」と語られるが、そこには兵士としての要領の良さが問題とされている以上に、「見つけれられない」ことを条件に、ささやかな逸脱を許す余地こそが示されている。

また、二等兵は多量な雑務を任されるが、仕事量は均等ではなく、要領の良い兵士が他の兵士を「踏み台」にすることで評価されていくさまが描かれる。こうした語りは、規律違反者や劣等兵の出現が半ば必然的なものとされていることを示唆する。その後加介は病院へ収容されるが、病院内の秩序は乱れており、帝国軍人たる兵士を再生産するような空間としては描かれない。

安岡は『遁走』執筆以前に野間宏『真空地

帯』に言及し、落ちこぼれ兵士安西に注目する。安西は「組織」のあるところでは「必ず失格する」男だが、自身が軍隊を描く際には「安西のやうな男の眼」をもつて語らせたという。規律の内面化と、病院という空間の機能不全の関係性の分析を通し、安岡が描いた「組織」のありようを明らかにしたい。

〈書く機械〉となること

——口述筆記創作のジェンダー構成をめぐって

田村 美由紀

作家が口述筆記によって執筆活動をおこなうケースはしばしば見受けられるが、従来の研究ではテクストの制作過程の内実を示す事柄として言及されることはあっても、口述筆記という創作形態そのものに十分な注意が払われてきたとは言い難い。本発表では、主に谷崎潤一郎の口述筆記創作を一事例として取り上げ、特にそれが男性の作家と、女性の口述筆記者という性的役割分業に基づいておこ

なわれている点に着目する。一九五二年春に持病の高血圧症が悪化した谷崎は、健康状態の悪化に伴う仕事への影響から、原稿執筆の補助を担う秘書として伊吹和子を採用し、徐々に口述筆記による執筆を開始した。その後、比較的健康の安定を取り戻す時期もあつたものの、一九五八年秋に再び右手麻痺の発作に見舞われたため、それ以降は伊吹を中心として家族や女中までもが関わる形で、執筆活動のほとんどが口述筆記によっておこなわれることとなった。

本発表ではまず口述筆記のジェンダー構成に関して、テクスチュアル・ハラスメントの概念を補助線としつつ、その問題点を論じる。女性が男性の書く行為を代行するという創作上の関係において、女性の役割が正当に評価されず不当に扱われる状況を、ケアや感情労働といったシャドウ・ワークの領域とも接続させながら検討したい。それらを踏まえたうえで、筆記者を務めた女性たちが自らの経験をどのよう語り、意味づけているのかにも目を向ける。なかでも、伊吹が谷崎の口述筆記に携わった経験を綴った回想記『われよりほかに』（一九九四年）で度々繰り返される

「書く機械」になる」という記述を糸口として、男性作家と女性筆者との交渉の場における、ある種の見やすい非対称関係を切り裂くような抵抗の痕跡や、女性たちの主体化のありようについて探ることを試みたい。

大岡昇平における「歴史書」

中山 新也

本発表では、大岡昇平が「歴史書」をどのように捉えてきたかを明らかにする。大岡は井上靖、海音寺潮五郎、森鷗外等の「歴史小説」に対する批判を通じ、自身の「歴史小説」観を表明した上で、その持論を作品に反映させてきた。そのようにして書かれた『天誅組』、『将門記』、『堺港攘夷始末』等の諸作品はしかし、『俘虜記』、『野火』、『レイテ戦記』といった戦争小説、『武蔵野夫人』、『花影』等の恋愛小説、『事件』をはじめとする推理小説等に比して、評価されてきたと言いがたい。それは偏に、作品が史料に忠実であろうとし過ぎたために、読物としての面白さが損なわれ

たためであるとされてきた。大岡自身も、例えば『将門記』を「小説か論文か分からないもの」と評する等、史料へのこだわりが裏目に出た面があることを認めている。

だが大岡は、自身の「歴史小説」を、あくまで「小説」と定義している。同時に大岡は、『歴史小説』一般や「歴史書」に言及する際、両者を明確に分けて考えていた。従って大岡は、自身の「歴史小説」を「歴史書」とは区別していたといえる。では、大岡にとつて、自身の「歴史小説」はどのような点で、「歴史書」と区別されるのか。大岡文学における「歴史小説」と、「歴史書」の差異を明らかにするために、まず大岡が「歴史書」をどのように捉えていたかを考える必要がある。そのため本発表では、大岡が言及した全ての「歴史書」と、それに対する大岡の評価を分析する。これにより、大岡の「歴史書」への評価軸という観点から、大岡の「歴史書」観を明らかにする。また大岡の「歴史小説」論は、歴史家達には概ね好意的に受け入れられた。だが大岡は、自身の「歴史小説」論を評価した歴史家達を、必ずしも高く評価しているわけではない。本発表では、大岡と歴史

家の意見の相違という観点からも、大岡の「歴史書」観の分析を試みる。

円地文子『彩霧』論

——老女と少女をめぐって——

齊 田 春 菜

本発表は、円地文子の「老女もの」における老女と少女の関係、さらに少女の意義の一端を『彩霧』（『新潮』一九七五・一―一九七六・七）から明らかにする。

『彩霧』は、一九七〇年前後から最晩年にかけて円地が「老女の視点から、いろいろ発展していくといったような作品」（『國文学解釈と教材の研究』一九七六・七）と述べた一連の「老女もの」である。「老女もの」は、今まで老女を中心に理解されてきた。一方で見落とされがちではあるのだが、これらの作品で描かれる老女たちが、女の子、童女といった少女との関わりや老女自身が「少女のような」とその身体を表象されることがある。

例えば『彩霧』は、小説家である堤紗乃が

川原愨紀子から絵巻「賀茂齋院絵詞」を譲り受け、その絵巻を巡る物語、というのが大枠である。この二人が老女であるため老女は見逃せない表象である。しかし、『彩霧』において老女のみ検討するのでは、この複雑なテクストを理解するには不十分だと思われる。そこで重要なのは、老女と少女の関係や「老女・少女」の構図を浮かび上がらせることである。すなわち、紗乃の孫である少女明美を検討すべきだと考える。なぜなら紗乃と愨紀子と結びつける絵巻や齋院のイメージは、明美にも派生していくからである。

また「老女もの」における老女と少女は、藤田嗣治が描いたとされる絵の少女達が登場し、老女である志賀と対話する「蛇の声」(『海』一九七〇・四)や孫娘に「時々お祖母ちゃん、猫みたいに見える」と指摘される「猫の草子」(『群像』一九七四・八)などにも関係がある。さらに少女を考察することは「絶対的な少女」(広尾理世子「子供、少女、そして円地的兆候―『女坂』再論」『国語国文薩摩路』一九九一・三)とされる『女坂』(一九五七・三、角川書店)の須賀にも関わる。つまり少女についての表現に着目することで「老女もの」

やそれ以前の作品との関係も検討することができる。

〈幻想〉を編む

——雑誌『幻想文学』における編集思想をめぐって——

茂 木 謙之介

一九八二年に創刊し、二〇〇三年に終刊を迎えた雑誌『幻想文学』は、当該時期における〈幻想文学〉場を導いた存在であり、現在の文学場における〈幻想文学〉的テクストの隆盛状況に鑑みたとき、先行する重要なメディアとして検討を要請される対象である。本報告では同誌の編集思想を検討し、一九八〇年代～二〇〇〇年代に流通した当該雑誌の編集思想を明らかにすることを目的とする。〈幻想文学〉という脱ジャンルのなジャンルを扱う研究批評誌である『幻想文学』は、同時代の種々の文学・文化研究の動向と密接不可分な雑誌であり、その分析のためには雑誌に内在する多ジャンルにわたる諸言説を丹

念に解きほぐしていく必要があるが、その内容面の精査と共にそれらが如何様に提示されていたのかについても検討が必要である。その中でも編集者の思想は雑誌の企画・構成にかかわるものであり、雑誌の性格を考える上では見逃すことができない。本報告では編集後記・インタビュー・特集といった雑誌内に展開する編集者言説とともに、編集者による回想や報告者がこれまでに実施した編集者への聞き取り調査をもとに、同誌の編集が如何なる戦略のもとで展開していたのかを明らかにする。特にこれまで回想等で語られている同誌のあり様は時代潮流と乖離したものと捉えられがちであったが、「雑誌は生き物」という同誌の編集者・東雅夫の証言(報告者聞き取り調査より)にもあるように、同誌もまた同時代の文学・出版状況との間に緊密な関係を結んでいた。これを問うことは同誌と共に一九八〇年代という出版の隆盛状況から、その後現在までも継続している圧倒的な出版不調の状況の中で、研究批評誌というメディアが如何なるものとしてあったのかを考察するとともに、誌名としても冠されている脱ジャンルのジャンルとしての〈幻想文学〉が

如何に捉えられてきたのかを問うメタヒストリーの一端を形成することにもなるだろう。

フリースペースのご案内

日本近代文学会二〇一九年度秋季大会では、大会内容を一層充実したものとすべく、通例の研究発表に加え、会場内にフリースペースを設けます。研究者相互の交流、研究情報の交換の場となることを企図したものですので、会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。なお、設置するフリースペースは、具体的には以下のような場としてご利用いただくことを考えています。

- ・ポスター掲示による博士論文などの紹介
 - ・論文抜き刷りの展示、配布、販売
 - ・科学研究費補助金などの研究プロジェクトの報告書の展示、配布、販売
 - ・研究同人誌などの展示、配布、販売
 - ・研究会、学会などの紹介、学会誌の展示、配布、販売
 - ・研究サークル、読書会、研究プロジェクトなどの紹介
- 研究発表会場や休憩場に近接した教室をフリースペースとして設定します。フリースペースへ参加を希望する個人、団体の方は、直接会場にお越し下さい。会場で受付を行った後はご自由にご利用いただけます。会場では机、椅子等を用意しております。

【注意事項】

- ・参加資格は、個人の場合は、本学会の会員に限ります。団体の場合は、本学会の会員を一人代表者に立ててください。
- ・フリースペースは、大会開催中常時開場しておりますが、参加時間や、その形態などについては各自に委ねます。
- ・出品物等は各自が持ち込み、持ち帰ってください。会場等への郵送による持ち込みは受け付けておりません。
- ・出品物等の管理は各自でお願いいたします。日本近代文学会は、管理についての責任は一切負いません。
- ・学会公式ホームページにも関連の情報を掲載する予定ですので、併せてご確認ください。